

## 「はがくれ」と武士道との關係

湯 原 元 一

本日は明治聖徳記念會の御催しで一席所見を述べたらどうかといふことを林伯爵閣下より御話がありましたから御承諾は申上げましたが、其題意のことに就きましても色々考案を致しまして後に御答する筈でありましたが、何か其當時一寸思付いたことがありましたので斯んなことはどうであらうかといふことを申上げました所が、それでも宜からうといふことで、極狭い私の生れ故郷に出來ました所の「はがくれ」といふ、文字の如く葉隠れでもう私共の幼年の時分にも餘り知らなかつた位でありましたが、私共の先輩の人達は無論承知して居りました所の一種の鍋島藩に通じまして行はれました所の侍に對する所の教訓があります、唯今では私が持つて參りました所の鍋島の「はがくれ」と申しますものが一つ出來て居ります、是が案外世の一部の人に迎へられましたので何でも兩三年前に全集を篤志の人が出版を致しまして是も或部分には行はれて居るやうであります。實は幼少の頃の家庭の教訓を回顧いたしますといふと、確かに斯いふ主義に依つたものであるといふことを追々と思ひ出すこともありますけれども、私共の教育の當初に於ては斯ういふことをいふことは殆ど禁物であつたので、實は私は「はがくれ」なるものが舊藩に行

はれたといふことは餘程事を経て後に承知したやうな譯であります、それで私は直接に「はがくれ」なるものゝ教訓を受けたのでありませぬから、私の申しますことは或は「はがくれ」の眞髓を誤つて居るかも知れぬといふ虞れがあります。併し唯今に於て此本を讀んで見まするといふと、大體に於て殊に今日の世に於ては極めて偏狹な寧ろ野蠻的な教訓でありますけれども、又其中から大に採るべき所もあるやうに思ひます。就中今日の時世で色々道徳上の教訓がありますけれども、論が大變多い、論も亦隨つて高尚であります、どうも其割合に實行上の結果を見る、ことが出來ない。謂はゞ議論、言葉が多くて行ひが少ない、吾々の年來従事して居ります所の教育のことに致しました所が随分教場に御這入りになつて御覽になりましたならば分ります通りに、實に至れり盡せり申分なき修身の講釋を致して居りますが、どうもそれが徹底を致して居らぬ。それは教へまする人の説明の仕方でも今日では往々世間で申します通りに時代に適しない、又青年子弟の心、呼吸にも合はない、色々さういふやうなことも其一原因を成して居るに相違ありませんけれども、併し殊に重なる原因といふものは、説きまする人も之を眞に責任を重んじて實行をしよう、又聽きまする人も聽いて分つた以上は是も責任を重んじて實行しようといふことがない。大概道德上のことは、今古東西に依つてさう大差のあるものではない、唯だそれを實行するか實行せぬかに依つて其教訓の効果如何といふことが分るのである。唯だ話を致しまする者も上の空でやつて居る、又其説明が悪くても本氣で以てやつて、精神が其言葉の上に現れますればそれに何等かの感化を必ず與へる、又それ

を聴きまする者は篤と聴いた中には一つ位實行しようといふことに必ずなる。ところが近い所が教育上の勅語が御發布になりました以来、随分形式を見ますると小學校から殊に歐羅巴にも例の無い中學校高等女學校までも、教育勅語は勿論のこと戊申詔書までも教へることになつて居りますに拘らず、今日現在の狀況を見まするとどうもそれが一向効果が無い。一向効果が無いといふことは或は言過ぎであるか知れませぬけれども、或はもう少し年數が経つて社會の變動を見ましたならば或は斯うまでも効果が無かつたかといふことを言はざるを得ぬやうな時期もありはせぬかと實は思ふのであります。

私は年來教育に従事して居りますが、過般來臨時教育會の會員の末席をも汚しましたが、どうも世間に教育界などに従事さるゝ方は知りませぬが、教育に最も精通された方々の御揃ひであります。此點を實際御承知ないやうである。今日色々國民道德に對して國民が冷淡になつた、どういふ風にして之を救済したら宜からうかといふことがあります。何時も出まするのは修身の時間が少ない、一週間に一時間位ではいかぬ、もつと時間を増せば宜い、斯うやうな結論になるのであります。ところが私共はさうは思はない、今のやうな修身は何れかといへば時間は増すが宜い、減すには及びますまいが、増して見た所が効果は無からうやうに思ふ。一番大事な教育上の眼目ともいふべき所の修身の教育、是は實際に當つて見まするといふと、私共のやうな今日の青年とは餘程時代を異にして居りますが、其者が聴いて居りましたも、成程是ちや十分に行きまい、是では自分達でも納得出來ぬ、まして今日現代の新聞雜誌の影響を受けて居る

青年共が斯ういふやうな講義を聞いた所が逆も感奮興起するといふことは出来まいといふことを到る處で實驗する。私は頻繁に地方に出ますが、機會がある度毎に修身と國語との時間だけは必ず見ることに致して居ります。英語でありますとか或は數學でありますとか其他理化學でありますとかいふことは、其事は不足はありましても兎に角まだ筋が立つて居る、兎に角生徒に了解させることが出来るやうになつて居ります。此國語、國語に就ては今日の問題でありませぬが、國語のことは甚だ旨く行つて居らぬ。其次にそれよりもつと甚だしいのは修身である、修身を一時間なり二時間なり時間を呉れまして、さうして四十分なり二十分なり一種の方法を以て話をして居ります。それは唯だ形の通りに今日は忠臣の話をするとか、其次は孝子の話をするとか、そこらまでは宜いのでありますが、所謂徳目と稱へまして各種の勇敢な話を致しますとか、或は勤儉の話を致しますとか、色々千切れ千切れに千切つてしまつてさうして無理に時間に當嵌めてさうして先生が教へる、それに就て誰某が勇敢であつたとか誰某が勤儉であつたとかいふことを話すのでありますが、如何にも細工に過ぎて居る。細工は能く出来て居りますけれども話す人も御役目的で聽く人も御役目的で一向魂が這入つて居らぬ。是では何程國民道徳を説いても其説きましたことが眞に十分な効果を擧げ得るといふことは覺えない。小學校の初年度の所では先生も其積りでやりますから相當の効果はありますが、上の方に行きますと上の方に行く程効果が少ない。

私共が歐羅巴を廻りました時に能く擲擻ひ半分に色々子供に聽いて見ますと、何が一番面白くないか

といふに、宗教の講義が一番面白くない、成程歐羅巴に行きましても宗教の教授法は總ての學科から見ると一番後れて居る。坊主の方から斯ういふ風に教へて貰ひたいといふ一定の形がある、それだけは形以外に出ることは出来ぬといふことがありますから何處に行つても甚だ面白くないと思ふことがある。さういふことを考へ合せまして、丁度日本の修身の教授が西洋に於ける所の宗教の教授と似て居る。西洋の宗教の教授は學校で失敗いたしましたしても教會といふものが後の始末を致します。又空氣が一般に如何に基督教が衰へましても基督教がまだ社會の精神生活の根柢をなして居りまして、何處か觸れる所があります、殊に教會といふものが其事に就て責任を負うて居ります。日本ではさういふ教會は無い、學校は詰り教會を合せて仕事をする、斯ういふ風になつて居るにも拘らず唯今申上げました通りに教場に於ける所の修身の講義なるものは、一つの心の働きである所の道德上の思想及び感情が、無理に時間に當嵌める爲に色々千切れ千切れになつて居る。文部省の所謂修身教授法で發表された所の修身教授の要目といふやうなものが御承知の通りありますが、それでも同じ鯛の肉を刺身にするとか、或は吸物にするとか、酢味噌にするとか致しましても元來同じ物である、同じ物である所を形が變る爲にさういふ名前を附けまして列記し、其列記法に依つて教授を致すといふことになつて居りますから、どうしても其教へます所の事柄に無理が出来る、鯛は刺身にしても鯛といふものはどういふものであるといふことを教へなければならぬ。先づ酢の物、それから刺身といふやうになつて行くのでありますから、どうしても無理をする。同じ心の働きであ

る、而かも心の働きは大體幾つかに分類が出来ますけれども餘り小さく分つて心を八裂きにして教へるといふ風になつて、そうしてそれを時間に當嵌めるといふ風がありますから、色々教へましても其心の全體に直接に刺戟を與へるといふやうなことが出来ない。さういふやうな事も此修身教育の振はない又其效果の舉らない所の一つの原因であるといふことを始終思うて居ります。それでどうかして此修身教育といふやうなものが的確に廣くなくても狭くても構はぬから一つ何等か深い印象を與へるといふ風に教育をするといふことにしたい。私は始終さう思つて居りますが、私共が學校時代を顧みましても色々結構な話を承りましても今に頭に残つて居りますものは残つて居ります。稀に自分が墮落せむとする傾向があつた時にそれを引止めて呉れるものは一般的の教訓ではない、誰か、或は何事かに就て話された所を深く感じたものが残つて居るのであります。

是は御同様段々年を取つて見たならば大概同じやうなことになるが、一つ深い長い強い釘を打たれる、それがありますといふと其人は兎に角非常な墮落をせず済むことになりはせぬかといふやうなことで、私共は先輩諸君などにも質問を發したこともあります。其時には如何にもさうだといふやうな方も多いのであります、總ての徳目を皆萬遍もなく聽いて居りましても其中で何か一つでも宜い、孝なら孝でも宜い、忠なら忠でも宜い、忠孝なら尙ほ宜い、或は忍耐なら忍耐でも宜い、或は勤儉なら勤儉でも宜い、何が自分の腹に頭に確かり這入るやうに一生忘れぬような刺戟を受けて置きますと、それだけでも兎に角

人間と云ふものは極度まで墮落せずに人間として行く事が出来はせぬかと斯う自分の経験に顧みまして思ふのであります。ところが唯今まで申上げました通りに今日の修身教育は總て萬遍主義であります、何でも教へる。何でも教へるけれども別に大印象を與へない總ての事を教へて一向教へる所はないといふことになつて居るのが今日の國民道德の不徹底なる所で今日の社會の狀態は又將來に於ては憂慮すべき狀態にありはせぬかと竊かに憂ひて居るのであります。今日皆様が學校の中に御這入になりまして學校に書いてありますものを見まして是で何で國民道德が衰退するか殆ど疑ひを御起しになる位に善く書いてあります。現に今日の教育界でも素人の方が這入つて居ります、文部省の徳目何かいふものを見まして、是で申分なき教へである、是で國民道德の教育が徹底しないといふことは結局時間が少ない、一時間か二時間か三時間が増してやらうぢやないかと斯ういふ議論を立てる人があるのであります。併ながら實際を御承知がない。獻立を見ますと何も缺けて居る所はない。けれども修身の教育といふものは違つて居りまして不完全でありまして何か深くならなければならぬ。教へる人と教へられる人と合致しなければならぬ。もう一つ責任の厚薄の上から申しましても教へる人の心に矢張りしつかり信念が無い、非常な熱烈な心を以て其問題を捉へて居らぬ、つまり教へることが生きて居らぬ、是が缺けて居る。さういふやうなことからして何處か非常に辛辣な深刻な刺戟を與へます所の教訓法といふものが何處かにありはしないかといふことを心掛けて居ります中に、例へば吉田松蔭とかいふやうな人の自ら書きましたもの、中など

には成程と思ふやうなことが澤山ある。總て自分で之を信するばかりではない、行なつて見て自分の爲め又國家の爲めにならうといふことを口にしたり又は書いたりしたものは必ずさういふ所がある。是は皆さんの御承知の通りであります、それに反して學問を學問として教へる、例へば幕府時代の儒者、孔孟の教へを研究して之を又子弟に傳へる、詰り御役目にやる、學問を學問として教へる、さういふやうなことは結構なことを教へはする、天地人三才に互つて教へますけれども、どうも一向面白くない。松蔭あたりのことになると随分極端な偏したことがある、けれども何か印象がある。殊に儒者、朱子學者などのいふたことを聴き書いたことを讀んで見ますと、申分がないが、白湯を飲んだやうなことになる、場合に依りましては腐れ學者といふたのは無理もないと思ふやうなことがあるのであります、それでさういふやうなことが今日の教育に於て繰返されるといふことであつたならば逆もいかぬ、何か其處に深刻な現象がありはせぬか、それを探して居る中には極々野蠻的であり又偏狹でありますけれども、「はがくれ」の一篇を根氣宜く讀んで居ります中には随分分らぬことも其他随分馬鹿らしいこともありますが、其中に必ず御讀みになつた方には成程と思はれる事があります。其代り勿論一般的でない、偏して居りますことは申すまでもないことであります。兎に角深刻なる印象を興へるといふ意味に於て此「はがくれ」といふものは尊い、教へたことは必ず徹底的に實行させる、此一點に於て此「はがくれ」は今日でも教育上から見て採るべき所があるといふやうに自分は信じて居ります。それで實は此「はがくれ」といふものを一讀することを私



は教育界に勧めたいと斯う思ひまして、曾て兩三回に互りまして或雜誌で教育者に向つて此「はがくれ」を紹介したことがあります。題を選びました理由及び「はがくれ」が今日に於て尙ほ相當に採るべき所があるといふことを申し上げます爲に前以て一寸此事を申し上げた譯であります。

唯今申し上げましたやうな譯でありますから此「はがくれ」に書いてありますことは極めて狭い、一般に互つて居りまするけれども重きを置いた所は極狭い。それから又「はがくれ」といふものは其當時専ら江戸を中心として行はれました武士道の本に比べますると形式打破である。武士道の沿革などいふものは今日此處で論ずる譯ではありませぬが、武士道といへば所謂源平二氏の起りまして後に一つの武門武士といふ階級が出来て其階級を維持せむが爲に、其階級の特色を發揮せむが爲にはどうあつても何か一種特別の道と申しますか、さういふものが無くてはならぬ、是はもう軍人には軍人の道があり又役人には役人の道がある、細かく申しますと俳優には俳優道があり、藝人には藝人道があるといふ鹽梅に一つの階級が出来ますと必ず其階級を維持し其特色を發揮し又發展を圖る爲には一種特別の一つの道徳と申しますかさういふものが出来るのは是は當然のことである。其根底に於ては國民道徳の一部分でありますけれども、其特色といふものは又一種特別の一部の人々の爲にする一つの色彩を帯びて居る。極悪く申しますと盜賊の中にも一種の道徳がある。道徳といふのは悪いか知れませぬけれども、一種の彼等の中に約束がある。さういふやうに何の社會にも何か生存をなす所の必要なる條件が出来る。詰り源平二氏が出来まして、さう

して武門武士といふものが出来て、さうして其後に其生存に必要な道德が武士道である。日本の武士道は、何さうぢやない、建國の初めから起つて居る、武道の歌を何某が作つたと申しますが、さういふことを申しますと何れの國でも文武兩道で國が出来て居る。殊に日本の建國の初めなどは外國のやうなことはない、歐羅巴あたりは建國の初めより武勇談であるが、日本は所謂ヒーロー物語が少ない、寧ろ武より文が勝つて居る。無理をして國を立てたのではない所謂王道を以て樹立して居る。神武天皇は決して御東征ではない、御東遷であるといふ事をさる學者が論じて居りまする通り建國の初めから亂暴狼藉はない。歐羅巴あたりには於ては其歴史の初めを飾つて居りまするものは武勇談である。日本は武を以て國を立てるといふことがありますが、是は西洋に較べますと武勇を以て立つたのではない、寧ろ文徳を以て立つたというて宜い。物部大伴二氏が武事を掌りさうして武士が一手でやつて居つたといふ、其精神が一部分には存在して居ります、是は事實には相違ない。事實には相違ないけれどもそれ等は皆朝廷の御用を勤める、唯だそれが一つの階級を成しましてさうして其階級の精神を維持せむが爲に自然に發達したといふやうなことは、是は特別なのでありますから、精神の傳統から申しますと寧ろ日本國民性の現はれの一面に相違ないのであります、手練り手練つて見たならばそれは其時分の大伴或は物部兩氏の中に現れたもの、或は建國の初めに現れたものといふことがいへるか知れぬ。けれども先づ極はつきりと唯今申すやうな意味で其一つの道或は道德といふものが現れましたのは是は矢張り此武門武士といふものゝ起りました後と斯う見る方

が私は穩當であらうと思ひます。そこで斯の如くして先づ源平兩氏がどういふ譯で起りましたといふことは私が諄々しく申すまでの必要はないのであります。是は其當時のことでありますが、さういふ風にして武門武士が起つて武門武士に必要な所の一つの道が出来た、是が即ち武士道である。是は勿論朝廷の所謂御公家様方、月卿雲客といつて柔弱になり切つた所の、先祖の遺訓に依つた所の一種の位置を得ました所の者に對してどうしてもそれだけでは國が立行かぬのでありますから、もう一つ補ふ所のものがないければならぬ。併し武事・武權、兵力といひますが、兵力を代表いたします一つの階級が必要である。

是が此月卿雲客即ち文事の勢力を代表する所の一つの階級に對して起りましたのでありますから、是は勿論武事を以て其階級を代表して居る。其意味から出来た道徳即ち道でありますから、それから割出しますといふと、どういふやうなことが必要であるかといふことは最早今日でも大凡推定することが出来る。武事で以て立つ、兵力で世の中に立つといへば先づ質素儉約をしなければならぬ、或は懶怠驕奢を戒めなければならぬ其他戰爭に必要な所の武事の訓練、練習を十分にしなければならぬといふやうなことは是は當然それに附いたものであります。何もそんなに別に珍しいことでもない。でありますから鎌倉時代から足利時代、徳川時代に何を爲すべきか、何を注文して居りますかといひますと、唯今申しました通り成立ちました原因がどういふことをしなければならぬといふことを注文するのでありますから、成立つた原因を考へますれば彼等が最も心掛けなければならぬ所の其生活上の條件といふものは、自然にそれに

對して起つて來る。だから能く武士道の書いてある本などに諄々しく書いてあるものを見ますと、鎌倉武士に對する要求も其後の武士に對する要求も言葉こそ變りまするなれ精神は變りはない。今日に軍人に賜りました御詔勅はさういふ數百年の長い間武士に對して重んぜられた點を最も能くコンデメンズされて能く明白に列記されて居ります。あの事も詰り歴史上に承認されました所の事を御上に於て御認めになつてそれを一層明確に御示しになつたといふことは丁度恰も今日の憲法と同じことである。憲法といふものは何も新たにしたものではない。性質に於ては教育の勅語に於ても、道徳に關する所の御教訓も、結局吾々の祖先が歴史あつて以來實際やつて來たことを唯だ平の文字で極明確に御現はしになつたことである。それでありますから今日の軍人に賜はつた勅語は是は武門武士が起つて當然其階級を維持して行くに必要な所の道徳上の條件、併ながら矢張り時勢が變りましたから其時分には其當時の主君、自分の直接に事へます所の主人の爲めといふことで、今日ではさういふ中間の主人はありませぬ、今日では吾々上御一人を仰ぐの他はないのであります、其以上無い所の上御一人に御事へ申すといふ意味で、詰り御奉公する主人が昔と違つたといふだけでありまして、事へる人の心持から申しますと唯今申上げました通り鎌倉時代武士の心得として要求された所の心得と何等變りはないと思ふのであります。そこで是も鎌倉以來戰爭は絶えず、世の中は亂れて居りまして色々な戰爭などが頻繁にあります間は口で申しますよりは實際から餘儀なくされて、さうして其所謂武士道といふものが實際に於て行はれ、又實際上からして色々

改善に改善を加へ、其形を變へまして時勢に適應するやうになつて來ました。鎌倉時代には大體武士道など、特別に教へたものはございませぬ。何とかいふものがありますが多くは嘘であるといふことを専門の方から聽いて居ります。未だ曾て源頼朝の兵法とか其他昔の兵法の著述などはありませぬ。ズット昔は支那の兵法を見まして、大江匡房が源義家に講じたといふやうなことはありますが、是等は實際は何もなかつたらうと思ふ。唯だ漢學者などが支那の書物を讀んで聽かせましたので、それが爲に源義家が軍人として非常に偉くなつたといふやうな風に本などには書いてありますけれども、それは源義家といふ者が武門の家に生れて親父よりも立派な軍人である、家柄が軍人であるから、それで立つて行かなければならぬといふ軍人的精神を有つて居りますから、或は家庭の教育で薰陶されて居りますから、それであんな偉い者になつたらうと思ふ。決して大江匡房が一度や二度支那の兵法を講じたからそれで偉くなつたといふことは嘘であらうと思ふ。私はさう思ふ理由がある。一體話が脱線しますけれども、昔から王朝の文學は隆盛である、昔から隆盛であつて是が一番日本の文學史で非常に光彩を放つたなど、申しますけれども、實は其時分の文學など、いふものを能く本氣になつて讀みますればひどいものである、中には國體違反であるといふことが大分ある。それは本朝文粹の正續兩篇を熟讀された方は私の説明を俟たず御承知であらうと思ふ。殊に文章など、いふものが最も下等な支那の隋唐の文學を眞似したものである、私の目から見れば最も下等なものと思ふ。文字の上に於ても亦思想の上に於ても極下等、一體あの中に出て居る

漢文を見ますと實に恐しいむづかしい字を書いて、さうして對句ばかりでやつて居りますけれども、多くは其當時の漢學者が自分が飯を喰はして貰ふ爲の辭表の代作である。月給が少ないから上げて呉れとかいふやうな事で、それが文字が綺麗だから結構なことが書いてあるやうに、立派な精神を書いたやうに見えるが、其實は卑しい。私は是は能く讀んで申上げるのだから決して事實を誣ふるのではない、人格の疑はれるやうな野卑なことばかりであります。唯だ文章が綺麗なものだから漢學者などは王朝の景雲とか何とか書いて居ります。或はあれが景雲であつたならば、實にあれが政治上の勢力を得たならば日本は疾の昔に墮落したであらうと思ふ。日本を救ひ得ましたのはあれ等が失墜いたしました、所謂月卿雲客が失墜してさうして鎌倉武士が興つて（大義名分から申しますと聊か申す所もございしますが）是等が代りましたから日本が今日の重きをなすに至つたのであります、日本が兎に角武權の國であると認められて居るのは武門武士の上から出たことで、大義名分から申しますとかれこれいふべき所がありますが、實際の所は新井白石が申しました通り、矢張り頼朝のやうな者がออกมาして、詩歌管絃に耽つて政治は勿論のこと一般の世俗を墮落させるやうなことを書いて居つた當時の風を打破して其墮落を救ふて唯今申しましたやうな武權の世となしたことは確かであります。是は餘波でありますけれども思付きましたから御參考までに申して置くのであります。

偕鎌倉時代からして戦争の頻繁にありまする時代には本などは無い、武士道に關係して居る時には本を

書くやうな優長なことはない、それよりは實戦に臨む、其中に冥々の間に所謂武士道が進んで來たのである。徳川時代のなりまして所謂天下が三百年の泰平を維持する、徳川家康の老功なる取計らひで先づ是から將來無事であらうといふことになりまして、始めて所謂武士道に關係いたしました所の著書が出ましたことは明かであります。所謂兵學者でありますとか、或は武藝の學者でありますとか、其他各種の擊劍にはどういふ流派が起るとか、柔術にはどういふ流派が起るとか、さういふ各種のことが書物になつて現はれた。書物になつて現れる以上はどうしても理窟が附く、理窟が附きますと理窟は一通りではいけない、一度話をして更に又話をすれば飽きが來るから今度は目先きを變へてやらうぢやないかといふやうなこと、同じで、一通り理窟は附いて居るが、今度は時代が變つて來れば更に新しい理窟を附けるといふことで強ひて理窟を附けるといふやうなことになる、是は一般にどの方面でもさういふ弊害がある。一體實行を本とするに就てさう理窟を變へるべき必要はない。親孝行をするといふことは何故に孝行するかといふやうなことを餘り説く必要はない。今度は支那流に説いて見やうとか、西洋流に説いて見やうとか、さういふやうな細工をする必要はない筈である。親といふものは顔を見れば可愛い、子供は顔を見れば可愛い、之を無理やりに理窟を附けなくても餘り心配させないやうにするといふことにすれば宜い筈なのである、それを諄々しく説明すると却て親孝行の心を冷却する。私は小學校位までは宜いと思ふが、高等學校まで親孝行の話をするといふことは要らぬと思ふ。それは親の顔を見れば可愛い、子供は詰らぬと思つて

も子供の顔を見れば可愛い、病氣でもすれば餘計可愛い。それを水を差すやうなことなく一通り暖めてやれば宜い。殊に夫婦のことなどは夫婦のことを知らぬ生徒に小學校の先生が夫婦相和しなど、いつて教へる、何故かといふと夫婦の事が勅語にあるからといふのである。さういふ馬鹿げたことをするから教育といふものが形式倒れになりはせぬかと思ふ。さういふやうに、何故に、何故にといふやうなことで理窟を附ける。それは學問として取扱ふには差支ないけれども、修身として實行を主とすることに説く必要はない。さういふやうなことをやるといふことが却て今日の國民道徳が進まぬ所以であると思ふ。それで前申上げました通りに、くだらぬ書物が澤山あります、武士道叢書など、いふものが出來て居ります。曾て見たことがあります、それは後とから色々要らぬ事を書いてある。本として書く以上は今度は理窟を附ければならぬ、尾緒を附けて完全にしなければならぬ、必要以外に潤色してある、此區別をして書を見なければならぬ。例へば武士道に關係したことであるから武士だけの方面で宜い筈の所が終には聖人賢人の教へを藉り或は佛教の教を藉りるとか色々所の所に手出しをするものでありますから、分量は多くなつて來ますが刺戟が薄くなつて來る。理窟を附けて是は禪學に基いて禪の修養をしなければならぬ、是は性理學に基いてやらなければならぬとかいふやうなことで、それは第一流の人はさういふ玄幽の道に入るものであります、第一流でそれは教へられぬ、皆吾から道に入つて自得しなければならぬ。自得すれば成程是は禪學に一致して居る、或は性理なら性理に一致して居る。斯ういふことが順序であらうと思ふ。



初めから禪學をしなければならぬ、性理の學をしなければならぬといふことで擊劍が上手になるものではないと私は思ふ。是は私が申すまでもなく所謂藝を一心不亂に修練すれば何か大悟徹底するものである、初めから朱子の語類を讀み、性理の學をやり、又座禪をした上で擊劍の下手な者が上手になるものではない、下手なら寧ろ盲滅法に劍術を使ひ、盲滅法に柔道をやつて居る人が終に何か大悟徹底して、その上でそれを明けて見れば禪もある、性理の學もあるといふことになる。ところが今いふ通り世が泰平になつて文學者、兵學者が出来て初めは簡單な説明をする、次に門人が出て今度は言葉の上で教育して要らぬことをいふ、閑暇だから本を作りさうして面白くおかしくする。曾て軍人の話を聞いたことがあります。日清日露の戰鬪に従事した一局部で、簡單明白で話は面白くない、ところが新聞の從軍記者などから聽くと話は面白い、彼方から聽き此方から聽き話が面白い、但し從軍記者の話は半信半疑で聽いて居る、併し實戰に臨んだ方から聽きますと洵に面白くないけれどもが確信して聽いて居る、さういふやうな差である。更に進んでは講談師が戰さの話をするのを聽いて見る、あの道理で戰さが出来るものであるかないかといふことは無論聽く人は疑ひを有つて居る、甲陽軍艦とか何とか色々ありますけれども、吾々はあれを聽いて見ると軍人當局の話より分ることは分るが、吾々のやうな其以外の者から見ると總てを初めから疑ひを以て聽いて居る。要するに斯ういふやうなものになると唯だ理窟をいはむが爲に理窟をいふ、勘定をするが爲に勘定をするといふことになりまゝから、其ものが讀まれて精神的にどれ程の効果があるか、此知

識があつたならばどれ程効果があるかといふ事に甚だ疑ひを挾まざるを得ぬのであります。斯ういふやうな形式上の風潮に對しては何處からか反動が起る、即ち實際の立場からいざ本當の戦さをする、戦さをしてどうしようかといふ心持の人からいへば斯ういふもので満足出来るものでない、寧ろ是に向つて反對をしなければならぬ、此意味からして斯ういふ江戸を中心とした元祿時代の文學者が講談師同様の書物を書きまして、さうして頻りに筆舌の上で鼓吹しました一種の武士道鼓吹に對しまして反動的に起りました所のものが此鍋島の「はがくれ」に書いてあります所の武士道ではあるまいかと斯う考へるのであります。色々讀んで見ましたけれども是が一番摺實で華を去り實を採るといふか、先刻屢々申上げました通り極めて野蠻である、極めて偏狹である、大正の書物としては餘り低い、併し大概陣笠連に教へるには是に限ると思ふやうなことがあります。所謂理窟に對することは抜きにしてさうして敵と對する時にはどういふ心掛をしなければならぬといふやうな戦争に對して精しい説明をしない、戦争といふものは敵を叩き殺せば宜いといふ斯ういふ立場から論じてある。それが今申上げましたやうな江戸の賑かな所で他のものが話を聽いて面白いと感ずるやうなものと較べて見るとまるで違ふ。是も脱線を御許して貰ひたいのであります。が、能く江戸、日本の文學、此文學の中にも小説でありますとか或藝術でありますとかいふものは無論都會の産物でありますが、もう少し眞面目といひますか例へば漢文とか漢詩とか或は和歌であるとか、昔からクラシックのものは田舎が宜い、江戸に於ては大概墮落する、江戸の一例を挙げますと、江戸の詩人な

どが漢詩を作ります、江戸で出来ましたものは非常に評判が宜くて吾々は江戸とか京都とかいふものを中心としたものと思つて居りましたが、其實は舊藩の御抱へであつて、あまり世の中に現はれぬ菊池五山などいふ人のものに宜いものがある。一面に於て書畫の賣買をするとか或は金持の坊ちやんを連れて遊びに行くとか、添削をする場合に澤山圓々を附けてやるやうな漢詩人が有名になつて居る。私は副島伯のお祖父さんなどの時代の支那人も感じたといふ或る漢詩で有名な先生が東北を廻つて會津の藩などでは學風を一變されたといふことを曾て承つたこともある、さういふ風に、見る人は能く見るのでありますが、主も私の郷里などでは江戸に行つて學んでならぬものは江戸の詩であるといふてゐました、即ち幫問みたやうな者が都々逸みたやうなものを漢字で現はしたものだといつた。ところがさういふものが日本の文學史の漢詩の所に行きますと必ず代表的人物として出て居る。

さういふやうな鹽梅で日本國中の富を集注してさうして稍々墮落した所の江戸に於ける所謂江戸を中心として行はれました所謂文學者、兵法家とかいふものゝ書きましたものは、詰り江戸の人氣に適するものであるからして田舎に居りました所の本氣になつて、いざ事のあつた時にはどうしようといふ人には必ず信用を得なかつたらうと思つて居る。明らかにその反動から斯ういふ本が出来たといふことは書いてありませぬが、本の筋を見ますと領かるゝ節があるのであります。それで私は小さいものを持つて参りましたが、(大きいものもありますが)是は大概御承知の方があるか知れませぬが、斯ういふ風にして思ひ付

き思ひ付き唯だいいふたことを前後次第もなく誰か々書きましたものを、傳寫の儘になつて傳はつて頗る御國訛りなども出て居りますから、洵に本としては面白くないのであります。併しさういふ所に大變味ひがある、飾りがない。一體文章といふことを考へて書きましたものには本當の文章は決してない。先きにも申上げました通りに王朝の時代などが極端なもので論をして本を作らうとして理窟が先きになりますから、本は精神が抜きになる。書く字も間違つても宜い、誤りがあつても構はない、唯だ文字を書くとか書かせるとかいふものに本當の精神が現れて居る。是も年來何時か機會があつたら御話して見たいと思ひましたが、一體日本人とは何ぞ、日本人とは誰ぞ日本人はどういふ書物に求めて宜いか、どういふ事物に求めて宜いかといふ始終疑ひを有つて居る。日本人といふものは吾々位の年輩までに紹介されて居りますものは國學の方は別でありますから古事記、日本書紀といふものは國學者のやうな人の方で普通は日本外史とか大日本史といふやうなものに依つて紹介されて居る。あれはどういふものに依つて作られたかといふと、支那人から非難のないやうに一生懸命に漢文を稽古して漢文を以て日本のことを翻譯して居るのである。自然漢字を使ひますと比較を取りますにも成るべく支那の歴史にある所の英雄豪傑、英雄豪傑に限りませぬけれども比較を取る、支那の人物に比較を取る。支那の人物に比較を取ると其人がえらく見える。其漢學者が例へば人物なら人物を傳へます時には、出来るだけ支那人にしてしまふ。又其思想なども支那のえらい人に近いものが偉い人といふことになりますから、漢文で傳へられた日本人は何時か支那人のや

うになる。えらければえらいやうに支那人になる。兩三日前に水戸の徳川侯爵閣下に或所で御目に掛りました時に申し上げましたことですが、大日本史を御出しになつたことは結構であります、實に漢文で書いてありますけれども日本人の性質を枉げるやうなことは比較的少ない、但し大日本史の論叢といふ、神武天皇から以來の主もなる人物の批評をしましたものが安積澹泊の書きましたもので、是は水戸で出すか出さぬか大評議がありまして出さぬことになつたさうであります。ところが今日になつて出さぬことが間違つた、出した方が宜いといふことで今日では論叢が再び世の中に現れて居りますが、元は水戸では責任を負はないといふことで各藩に寫本で傳はつて居ります。私は山口の高等學校に居りました時に、あそこでも縣廳にありましたのを拜借いたしました寫本で讀んだことがあります。其時などは何とも思ひませぬが、近來讀みますと安積澹泊は漢文に非常に凝つた人で、あつさりしない練つた文章でありますが、其人物評を見ますと日本人が殆ど總て支那人になつてしまつたやうに見える。論叢が此頃いろ／＼の方に論議されますが、あゝいふ風になるとまるで日本人は何處に居るか分らぬ。漢字で書く漢文の思想で向ふの人物に近付かせようとするのでありますから、漢學者が日本の人物を取扱つた結果どんなに吾々の本當の特色を失つたか分らぬ。頼山陽は幸ひにして文章が下手である、文章が下手ぢやない、吾々から見れば上手であるが、専門家から見れば誤つた文があるが、日本人を一番能く傳へて居る。是は新井白石の藩翰譜などには能く傳へてある。それから本居先生、平田先生が書紀を排斥しまして古事記を採られたといふ點は頗

る日本の真相を捉へ得て居る。漢學者が餘程善い事をしましたけれども日本の歴史を漢文で書くといふやうなことをしましたのは忠實に日本のことを書く積りでありますけれども、終に日本を誤り又日本人を誤り傳へたことは夥しいものであらうと思ひます。日本書紀といふものも朝廷で御修めになつたけれども、或は六國史でもさうである、詔勅などは引いてありますけれども、實は其詔勅は偶然であつたか知れませぬが、稗官といひますが支那の小説の文章を其儘に採つたことが大分ある。是が本當の天子様の御發表になつた詔であるといふことは長多い話であります、天子様の詔勅は御重んじになつたのでありませうが、さういふことに責任はあること、思ひます。さういふことから申しますと矢張り素朴でありますけれども是「はがくれ」は文章の爲に書いたのではない、自分の意見を述べむが爲に書いたもので、唯だ缺點を申しますと其文章が下手な爲に意を明瞭に表はすことが出来なかつたことで、決して自分の考以上に潤色したものでないと思ひます。

くだらぬことを申上げまして餘り長くなりましたが、「はがくれ」の中で著しき主たる思想は先刻申上げました通り極省略して國家もなければ世界もない唯だ舊藩の鍋島といふものを一つの國として此人は國學といつた、國學院の國學、國の學問といつた。鍋島に御奉公するには其時からいへばさうです。それから鍋島藩の風俗を能く調べたのです。それが廣く見ますと日本國家になるといふ心持はそれである。其代り狭い、今日から見れば聴きづらい狭いものである。昔はさうであつた、私共などは舊藩の頃には何處の藩

でも島津家に於ては島津家の爲め、毛利家に於ては毛利家の爲めと教へられたものである。それでさういふ風な意味で先づ第一に所謂御主君、御主人大事といふことでありますから、此御主人大事を上御一人の爲めと斯ういふ風に直しますと、心持は今日でも亦明瞭に採用して宜からうと思ふ。

そこで其中で、もう極々短兵急に實行本位でありますから萬事大責任を負うてやる、大責任を負うてやるといふことは生命掛けてやることである、生命掛けてやる程に責任を重んずる、そこで何をするにも死といふこと生命掛けてある、死ぬといふことを考へることが此一篇の骨髓である、メ、ントモーリー義勇兵が頭蓋骨となる目的でナポレオンの戦争に出たといふやうなこと、同じことである。第一死ぬ、人間は何時でも死ぬものであるから死んでしまへ、さういふやうな精神がある。何でもかんでも本當に仕事をするには最後に於て死ぬ覺悟でなければならぬ。能く今日「義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」といふ。義勇公に奉す生命財産を無條件に提供するのである、それを阿呆陀羅經を讀むやうにやつて居るが、本當に義勇公に奉する時には斯んなことでは恐怖の念を抱かしむる、それを義勇公に奉じといふことを平氣の平左衛門でいつて居る。外國の學者もいつて居る通りに愛國心は段階はない、一等愛國心二等愛國心といふものはない、それでは愛國心ではない。ところが義勇公々々々といふて居るが、いざ事あつたならば一寸待つて呉れと相談するやうなことでは役に立たぬ。私、道徳聯合會に出ましたが、實に勝手放題なことをいつて居る。あの様子を見ると或は唯今申上げた、いざ事ある時には一寸待つて呉れ

といふことがあらうと思ふ。吾々はいはぬ、吾々がいふ時には先づさういふやうなことは教へて居りますから、成るだけ瞬間でも其心持になつてやる、曩に申上げました通り修身の講話などの時、先生が教壇に立つて今日は修身の講話をする、團十郎が芝居をするに腹切る時には腹切る心持になると同じやうに、其瞬間でも無條件で死するといふ心持になる、芝居掛つた思想だけれども、それが團十郎でなければならぬ、團十郎は腹切る時には腹切る心持になつた、ところが教師は腹を切る氣もなくして聲色を使ふ、さういふやうなことでは此所謂國民教育が徹底しないことになるのではなからうかと斯う思ふ。そこで例へば斯ういふことを書いて居ります、文句を申上げますと（此著者や何かのことは申上げませぬが、元祿年間の著述でありまして、中央では非常に江戸の文化の満開の時刻であつてさうして其當時は吉良上野、淺野の義士の忠臣蔵のあつた時であります）

武士道と云ふことは、即ち死ぬこと、見付たり。凡そ二ツ一ツの場合に早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわりて進むなり。若し圖にあたらぬとき、犬死なご、云ふは、上方風の打上りたる武道なるべし。二ツ一ツの場合に、圖にあたることのわかることは、到底出來ざることなり。我れ人共に、等しく生きる方が、萬々むかたなれば、其好むかたに理がつくべし。若し圖にはずれて生きたらば腰ぬけなりとて、世の物笑ひの種となるなり。此のさかひ、まことに危し。圖にはづれて死にたらば、犬死氣違ひとよばるれども、腰抜けにぐらぶれば、恥辱にはならず。是れが武道に於てまづ丈夫



なり。毎朝、毎夕、改めては死ぬ死ぬと、常住死身に成つてゐるときは、武道に自由を得、一生落度なく、家職を仕果すべきなり。

拙い文章でありますけれども、さういふことが書いてある。それからそんなやうなことが澤山ある。死といふことに就きましては一つだけ申上げて置きます。それから其次には、

餘り小理窟を云はぬで死際に是非の評だの當否の論などをせずに死ぬべきと思つたらさつさと死んでしまふが宜い。

餘り小理窟をいはぬ、隨て先刻申上げました通り軍略だの兵法などいふものは色々習ふ必要はないといふやうな極端な議論がある。例へば、

兵法などは習はずとも唯だ敵前にて目をふさぎ一足なりとも踏込みて云々

兵法だの軍略などいはずに敵に對しては目をふさいで敵さへ斬れば宜いといふ教へであります。是もなか／＼上手に言現はした文句などが澤山あります。中には斯ういふことがあります。

武士道は死狂ひなり。一人の殺害を數十人して仕かぬるものと直茂公も仰せられ候、本氣にては大業はならず氣狂ひになつて死狂でするまでなり。又武士道に於て、分別出來くるときは早後るゝなり。忠も孝も入らず、武士道に於ては死狂ひなり。中に忠孝は自らこもるものなり。

氣狂ひになつてやつてしまへ、是も私は眞理だと思ふ。一體最後の決斷などは道理から決斷するのではな

い、理智で判断するものでない。歐羅巴の心理學などに於てもさうなつて居る。最後の判断は其時に於ては氣狂ひがさせるかも知れぬ。其道行に於て最後に何方を採るか、其瞬間に採らせるものは決して理智の力ではないといふことを心理學などでも論じますが、それから見ましても斯ういふことは必ず不都合でないと思ふ。殊に戦争に敵を控へて居つてからに此場合に死んだものであらうか、もう少し後の時間に死んだものであらうか、是で死んで利益であるか不利益であるかと考へて居つては逆も戦さは出来まいと思ふ。それから其次の一例だけを申し上げますが、現代のやうな色々な歐羅巴のセンチメンタルのことを書きましたものとか、或は自己實現とかいふ傾向の小説を澤山御讀みになればなる程非常に變つて居りますから面白からうと思ふ。他日は斯ういふことが流行るかも知れぬ、餘り此頃の流行は一方に偏して居ります。詰りさういふ理窟をいふなど申すのであります。それから何でも「勝氣で行け」といふ、是が私の藩で弊を流した。私の藩では瘦我慢で行けといふ、吾々は其弊を受けた一人であります、瘦威張りをする、それは悪いのであります、又それが爲に善い事もある。それから「墳墓地を知れ」といふことが簡單に書いてある。

武士の大括の次第を申さば先づ身命を主人に篤と奉るが根元なり。斯の如くして後は何事をするといへば、内には智、仁、勇の三徳を備ふることなり、三徳兼備など云へば凡人の及びなきことの様なれども易きことなり。智は人に談合するばかりなり、最もなき智なり。

智慧といふものはどうかといふと相談するばかりだ、さうすれば限りがない。

仁は人の爲めになる事なり。我れと人と比べて人のよき様にするまでなり。

是も簡單にして明白なことで普通の凡人に宜しい。

勇は齒がみなり、前後に心付けず齒がみして踏破るまでなり。

是等も簡單明白で、勇は齒軋りして踏破つて行く。是等が却て學者の議論倒れより宜いかと思ふ。それから勝氣だといふやうな例を出しますと、勇氣を出すに普通の勇氣ではいかぬ、積極的の勇氣を出す。

大難大變に遭遇しても、毫も動轉せぬと云ふはまだしきことなり。大變大難に遭つては歡喜雀躍して進み勇むべきなり。

大難大變に遭遇して周章狼狽せざるはまだしきことで却て喜んで鼻歌を唄うて行くのが武士である、積極的に行けと斯ういふ風に書いてあります。大隈侯があの部分に於ては代表者であります。侯爵は兎に角八十までは吾々の代表で、確かにあの部分に於ては實行者であります。侯爵などは斯ういふ教へを受けてゐらつしやるから、あの部分に於ては實行してゐらつしやる。此方も他の御方より受けて居ることが多い、是は失禮な話だけれどもさう思はれます。勝氣のやうな所は尙ほ直茂の言葉を引きであります。

「肥前の鎧先」は最早、弱くなれりと見ゆ、其は往來人を見るに何れも上臆を垂れ、地を見て通行するが故なり、凡そ勇むところ無ければ鎧は突かれぬものよ、間には大言を言ひ肩胛を張る位の氣持が武士

の役に立つなりと。

是が私の國の弊として残つて居る。大言壯語する、さういふ風なやり方で、極狭くても理窟無しに何でもかんでもやる。それから其他には矢張り負けじ魂ひで色々なことを強く教へ込んで居ります。是も唯だ一つだけを原文にありますから申します。

人は元氣根性が大事なり、よしや首落されたりとても尙ほ云々

大野道賢は堺町人の恨を受く。道賢死刑の時町人共、家康に乞ひて火刑に處し、見て以て快となす。道賢焚殺せらるゝや、其骸骨、火中より躍り出で、傍人の佩刀を奪ひて、町人數名を斬殺して仆る、町人ども恐るゝ熟視すれば骸骨は既に炭と變じ居たる也。

私の郷里の人で高山某といふ人があつて泥棒が這入つた時にピストルを取つて撃たうとしたが、彈丸が發しない、泥棒は直ぐ兩手を切つてしまつた。其兩手を切られながら組討をしたといふことで、何でも閑院宮殿下が諫早に御出の折に御召しになつて、老人になりましたが賜はれた御盃が兩手が無いので戴かれな。苦しくないから其處で舐めろと仰せがあつた。其人は裁判をした人の話に、矢張り道賢のように泥棒を捕へた所が、あんな親爺に逢つたことはない、恐しい強い奴だといつたといふことを覚えて居ります。

片手を切られたならば片手で組付け、兩方切られたならば喰ひつけ、喰ひついて後はどうするといふやうなことが書いてある。是は唯だ元氣を鼓吹した洵に極端な話であります。其他段々ありますが、是は本に

あることでありますから此位に致しますが、其他普通のことでもありますけれども、謙抑々々いふことを普通の方では申しますけれども、其謙抑といことを餘りにやかましくいふことを反對に書いてあります。それから弟子を取つて武藝を授けることは下品であるから是は他所の國のすることで鍋島藩ではすることでないといつてある。是はプロフェッションナルである。此武道のプロフェッションナルは實に情けないものだと思います。榊原健吉君の所に行きましたが、後とて下谷の道場の前に、大和杖といふ杖を賣つて居る。それから吾々のやうな貧乏書生など、愛想よく話されて牛肉屋などで劍舞などをやられた。あの名門の末があんなになるものかと感じました。今日では御承知の通り日比野雷風、武士道鼓吹といふ。武士道鼓吹は宜いが浪花節語りなど、同じやうに劍客が劍を取つて人の前で踊つたり何かするのでは最早藝人であります。斯ういふことになつたならば芝居の蜻蛉返りと選ぶ所はない。今日の運動會などを見ましてもさういふ傾がある。木戸錢を取つて藝を見せる、是は藝は藝として名乗つて出れば宜しうございませう。武士道鼓吹といふことになられては甚だ武士道の煩ひをなすであらうと思ひます。さういふことを攻撃して書いてあります。是は私共賛成であります。其他武士の體面を重んずる、それから體面を重んじて所謂武士に對して武士的の趣味を養はせるといふことを努めてありますのが是が餘程日本の武士道の特色であると思ひます。私は何處やらで日本の武士道は趣味といふことから見なければ日本の武士道の特色を説明することは出来ない、唯だ優美であるとか或は謙抑であるとかいふことは何處にもある、歐羅巴の士道

に於ても同じことである、日本武士道の特色のあるところは一種の趣味である、藝術的趣味であるといふことではなければ日本の武士道の説明は出来ぬといふことは以前に意見を述べたことがあります。今でもさう信じて居りますが、是にも矢張り書いてあります。一つ申し上げますと

やさしき武士は、古今に實盛一人なり、討死の時七十餘なり。木村長門守、長髪に香をどめ討死仕られ候。武士は嗜深くあるべき事なり。

やさしき武士は白髪を染めて若い者と相伍して見苦しい態を見せないやうにする、それが洵に優しい心である、穢ない心を見せない、穢ない死態を見せないやうにする。首實見などいふことがあるので生前に於て穢ない所を見せまい、死後に於て穢ない所を見せまいといふ心である。馬場某、長湫の合戦に於て馬鐵砲を撃上でたれて落ちなかつたといふことは、最後に於て馬からひつくり返つて醜い態をしたくなかつた、其他昔から家康が大坂に行つても、あの後陣にしても何時首を取られるか分らぬといつて香を焚いたりしたことがある。獨り木村長門守といふ若い者ばかりではない、源平の時代から敵に名乗らして渡して宜い人に渡したといふものは大切な首である、其者を雑卒と見られて溝や何かに捨てられるといふことは嫌ふのである、綺麗な美術的の趣味である。鎧兜でもさういふ意味で出来て居ります。日本に於て武士道を説くに於ては武士道の趣味を加へませぬといふと本當に日本特有の武士道は説けぬと思ふ。降参をすることは嫌やである、支那あたりでは降参しても宜いものといふことになつて居る。降参には儀式があ

る、旗を立て、出るとか素車白馬にして出るとか、さういふことは西洋でもある。けれども日本の武士道は降参はしたくない、降参をするといふことは一つの道徳上の觀念ばかりではいかぬ、人の前で大小を遣つて後手に縛られて前に頭を下ける、忍びない状態で之を醜とする、悪とするより醜とするといふ所から降参しないといふことがありはしないか、それ等が日本の武士道の本ではないか、さういふやうなことを精しく御話申さずとも大概歴史上に現れた事實に於て御熟考下されば能く御了解のことと思ひます。一向だらしもない御話を致しましたが、唯だ私の心持のある所だけを御了承下されば幸ひであります。殊に皆様のやうな御集りに斯んな餘り通俗的なことを申すも如何と存じましたが、折角の御依頼でありますから、責を塞いだに過ぎませぬ(完)

獨逸潜水艇の御親閲式に臨みて

そこつ海安らしけるかや日の御子の

前にひれふち水潜りふね

(麻也)